

ウィリアム・プルーマー

6 ^{ダウンス}丘陵殺害事件

一頭の牛の側を通り 掘っ立て小屋を過ぎ
豚小屋と牛小屋を過ぎ
風にざわつく電線を張りつめた
等間隔に立つ電柱を過ぎて

^{はたご}旅籠を過ぎ ガレージを過ぎ 5
民衆のアヘンを
いつでも打ち込む用意のある
皮下注射針のような尖塔をした教会を過ぎ

清々しいサセックスの朝
「危険な街角」通りを 10
バートとジェニファーは歩いていた
今度もまた

相変わらず蜘蛛の巣が
イバラに張り付いている
雲雀は得意気にうたい 15
雌牛にはツノが生えていた

「ごらん 手が汗ばんでいる」とバートが言う
女は男の手の平に唇を当てる
谷間農場を見下ろす小道を
二人は歩いていた 20

一陣の風が^{ダウンス}丘陵を吹き抜けて
古代遺跡たる日輪が出現し
完璧な^{あした}朝が
始まった

しかし 沈黙の舞踏に合わせて 25
不吉な前触れの夏の稲妻が
男の胸の地平線上を走った
チラと横目を走らせて

横の女の顔を見る するとまるでアスピリンのように 30
男の隠せない青い目の中で
女のあらゆる希望が溶けていった
嘘が育まれる

男の額に 女は唇を当てた
「どこかに座ろう」と男が言う
「針エニシダの先のシダの茂み 35
それをベッドに 横になろう」

新鮮な 陽気な 朝
キイチゴの茂みの温もりが
磁石のように 暗闇から
目覚めた蛇を誘い出す 40

一匹の蛇が ゆっくりと体をくねらせ
眠たげに 気だるげに
サセックスの草地の上に
SOS と書いてゆく

ジェニファーは座ったまま 45
キノコに手を触れる
柔らかくて 肉太な
腐ったゴムの玉のようなキノコ

悲鳴をあげて手を離し
ハンセン病患者の肝臓のような色に怯えて 50
バートに寄りかかる 彼にはわかる

ジェニファーが震えている

丘の向こうの夜明けの海が
目論見に失敗してため息をつく
しかしまた 無数の目と共謀して
目を輝かせて笑っている

55

バートを見つめて その彼は空いた手でゆっくりと
コートからレーヨン・ストッキングを引き出し
素早く 慎重に
女の首に巻きつける

60

「ああ きっところなると分かっていたわ」
こう言ってジェニファーは
穏やかに だらりとなって
男が首を絞める間じゅう 微笑み続けた

雲ひとつ無い空のもと
波ひとつ無い海原が静かに横たわっている
そして シダの茂みを寢床に
殺された女が横たわっている

65

(山中光義試訳)